

私を堕とせるのはただ一人？いや、このからが恋人だし！

【第2話】

みなぎし　すい

## 【人物一覧表】

柊千咲（6）（12）（15）（現在）

：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

柏木奈子：千咲の叔母

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：女子高生

飯田早苗：女優

千咲の母（35）：千咲の母

男子（15）：千咲の元カレ

里見の母（40）：医師

少女

男子A

男女A

女A

○女子高・屋上（夕方）

柊千咲と飯田早苗、互いの顔をじっと見つめ合っている。

千咲M「やばいやばいばれた終わつた終わつた推しの女優にバレた終わつた」

千咲のひたいから汗が流れる。

早苗「あなた、ずいぶんと彩夏と仲がいいようね」

千咲「あ、えっと……」

早苗「そんなに仲がいいなら、彩夏の事情も聞いているでしょう？」

千咲「事情？」

早苗「次期社長に決まって、そのためいろいろ苦労してるって話よ」

千咲「あ、はい……全部を聞いたわけじゃないとありますけど」

千咲M「早苗さんは彩夏と仲のいい友達なんだ。いいなあ」

早苗「それについてどう思つた？ 正直に答えて」

早苗、千咲をじっと見つめる。

千咲M「うわああ！ これは推し女優じやなくてがちがちの委員長に詰められてる！」

怖い！ 何言つてもかどがたちそう！」

早苗「少なくとも今回は、正直にあなたに余計な不利益は生じさせないわ」

千咲「いや怖いんですけど！ 余計じやない不利益つてあるんですか？」

早苗「不利益とか、そういう余計なことを気にせず正直に答えなさいって言ってるのよ」

早苗、睨むような表情になる。

千咲M「なな、なんでこんな詰められてるわけ？」

千咲、おびえている。

千咲「は、はい……えっと、大変そだつて思いました。わたしは昔、医者を目指してた事があつたんですが、それで家族仲が悪くなつてすぐ諦めました」

千咲の母（35）と千咲（12）、机をはさんで向かい合っている。

千咲の母「ねえ、ちゃんとしてつていつも言つてるでしょ！ なんでこんなにテストの点悪いのよ！」

千咲の母、千咲に怒鳴る。

千咲「ごめんなさい、ごめんなさい……」

千咲、ぽろぽろと涙を流す。

○どこかの家・居間

千咲（15）と男の子（15）、向かい合っている。

男の子「いや、めんどくさいんだよお前。いつも、弱いけど大丈夫？」とか聞いてきてさ」

千咲N「いつしか、心がボロボロになつていたわたしは他人に弱さを受け入れてもらおうとした。だけど、心のよりどころだった彼氏に振られた」

（回想終わり）

○女子高・屋上（夕方）

千咲 N 「それから男の子の考えていることがわからなくなつて、男の子が怖くなつて、女子高に入学した。それでもボロボロだつた心はすぐにはもともどらなくて、3年になるまで友達がいない生活を送つていた」

千咲 「だから、彩…白石さんはすごいと思ひます」

早苗 「ええ、彩夏はすごいわ。人一倍がんばつて。柊、彩夏の隣にいるからにはあなたはそのがんばりに見合う行いをしているの？」

千咲 「あ…」

千咲、うつむく。

早苗 「聞く限りじや、すぐ諦めてしまう弱い人間に見えるけど」

千咲 「ご、ごめんなさい…」

千咲 N 「そうだ。わたしは、何もがんばれない人間なんだ。ちょっとでも彩夏の隣にい

られると、ちょっとでも彩夏と友達でいらっしゃると思つたわたしがばかだつた」

早苗「あたしは彩夏のことを尊敬してるの」

千咲「わかります……」

早苗「だから、隣はあたしがふさわしいと思ってる。それ相応の成績も取つてるわ。学年1位の彩夏と学年2位のあたし」

千咲「はい……」

早苗「あなたも、彩夏の隣にいたかったら精進することね」

千咲「はい……がんばります」

早苗、その場を立ち去る。

千咲、早苗の後ろ姿を見つめる。

千咲M「……あれ。結局彩夏との関係はバレたの？」

### ○ 同・3の3教室

千咲、机に向かって宿題している。

千咲「ぜんつぜんわかんない……宿題で応用

問題出さないでよお」

千咲、机に突つ伏す。

千咲M「昨晩は、早苗さんにバレてるか気になつて眠れなかつた……」

白石彩夏「千咲ちゃん。わかんないところは彩夏おねえさんが教えてあげるよ？ けつこう、おっぱいおつきいよね千咲」

彩夏、千咲の後ろに来て千咲の胸を揉む。

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

千咲「んっ！ あっ、ダメ……そこっ、ああんっ、はあっ、あんっ」

千咲、息と声を漏らす。

千咲の頬が赤く染まる。

神谷里見「おまえら何やつてんだよおおえ」  
里見、早苗、杉園愛梨、教室に入つて  
くる。

千咲「イツ！」

千咲、びくんと震える。

早苗「2人とも、破廉恥行為は慎みなさい！」

彩夏「勉強教えるのよ」

里見「どこがだよおおえ！まさかそっち系の勉強って言うんじやないだろうなあおえ」「え」

千咲「そそそんなわけないでしょ！」

彩夏「今から教えようとしてたとこ」

愛梨「仲、いいんだね、うらやましい」

千咲「いやいやこれ見て仲いいって言われても困るんだけど」「え」

早苗「柊。教えをこうのはいいけれど、眞面目にやりなさいよ。彩夏の時間の無駄になるでしょう」

彩夏「むー」

彩夏、むくれる。

○ 同・食堂

5人、食堂で昼食をとっている。

千咲M「も、求めてるんじやないし！触られただけだし！」

千咲、顔が少し赤い。

千咲M「にしても、やっぱ4人とも顔面偏差

値高い。特に愛梨ちゃん。ふわふわしてて  
超かわいくて眼福だなあ……」

千咲、愛梨を見る。

千咲「ねえねえ愛梨ちゃん、私服ってどんな  
感じなの？」

愛梨「ゴスロリ」

千咲「地雷系だ……かわいい」

愛梨「えへ、ありがとう。モデルやつてるか  
ら、いろんな服あるよ」

千咲「え、そうだつたの？」

愛梨「うん」

千咲M「やっぱ、やっぱすごい人ばっかじやん  
！　ね、こんど家行つて私服見に行つてい  
い？」

愛梨「千咲ちゃんの頼みだつたら、いいよ」

⋮

千咲「やつたあ！　ありがとう！」

で予定決めようね！」

千咲、笑顔になる。

愛梨「千咲ちゃん、コミュ力高いよね。わた

しと違つて」

千咲「ああ。これは友達が欲しくて焦つてゐるだけなんだよね」

千咲、すっと真顔になる。

彩夏「大丈夫だから。ここのみんな、千咲を歓迎してゐよ」

早苗「あたしは歓迎していなゐわ。彩夏の隣にふさわしいのはわたしよ」

千咲「推しに嫌われたあ⋮⋮つらたん」

○ 同・校門

5人、校門をくぐる。

道路を渡ろうとする小学生くらいの少女。遠くから走つてくるトラック。

千咲「ん？」

千咲、女の子とトラックに気づく。

○ (回想) 病院・病室

院長(50)、ベッドで横になつてい

る千咲（6）にゲーム機を渡す。

院長「はいこれ。がんばったご褒美」

千咲「あ、ありがとう……将来、ぜつたいみんなを笑顔にできる、お医者さんになる……」

⋮」

院長「そうか。じゃあ、ここで待つてようかな」

（回想終わり）

○女子高・校門

千咲「あぶないっ！」

千咲、飛び出す。少女を抱いておもいつきり飛ぶ。

鈍い音が鳴る。

トランク、止まる。

千咲「あうっ！」

千咲、倒れたまま苦しそうな表情で左足を押さえる。腕から血が出ている。4人、千咲のところに駆け寄る。

千咲「いた……だ、大丈夫？」

少女「大丈夫。それよりおねえさんのほうが」

千咲「だ、だいじょう、ぶ…あうつ！」

千咲、苦しそうに歯を食いしばる。

彩夏「千咲ちゃん！」

里見「千咲！ 動くな！」

里見、スマホを取り出して救急通報する。

#### ○病院・診察室（夕方）

千咲、椅子に座つて、白衣を着ている

里見の母（40）と向かい合つている。

里見の母「はい、これで終わり。幸い、重症

じやなかつたわ」

千咲、左足にギプスをしている。

#### ○同・待合室（夕方）

千咲と里見、待合室の椅子に座つている。千咲、松葉杖を抱えている。

千咲M「ここ来たのは車に轢かれた時ぶりだ

なあ」

千咲、心の中でそんなことを思いながら、少し悲しそうな顔をする。

里見「他のみんなには、邪魔だつていつて帰つてもらつたよ。悪い意味じやなくて、安静にさせるためにな。足、大丈夫か？」

千咲「1ヶ月弱だつて。まあこれくらいなら最悪なんとかなるよ」

千咲、明るめの表情になる。

里見「つてか、千咲すごいな。迷わずすぐ飛び出して女の子助けたじやねえか」

千咲「…癖で」

里見「癖でこんな自己犠牲払うなよおおえ」

千咲M「あ、毒舌だ。でも、早苗さんの恐怖くない」

千咲「それ、助ける方ね？ けがなんてまつ

びらごめんだから！」

里見「まあな」

里見、伸びをする。

里見「あたし、ここ入るために医者を目指してんだよ。母さんがよく言うんだけど、毒

と薬は紙一重なんだって。100パーセントの酸素が猛毒になるのも似たようなもんだ

千咲「詳しいね。酸素の話なんて漫画でしか聞いたことない」

里見「もしかして、千咲ってジョジョ読んでんのか？」

里見の顔が明るくなる。

○（回想）小学校・6の1教室

男子A「柊、お前男子なのにこんなのが好きなのかよ！」

千咲に向かって浴びせられる声。

千咲、机に座つて、仮面ライダーのフィギュアをにぎりしめて泣いている。

男子たち、千咲を取り囲んでいる。

（回想終わり）

○病院・待合室（夕方）

千咲「男っぽいやつはちょっと……」

と言ったところで、千咲の口が止まる。

千咲 M 「いや、こんなことで怯えてちや友達なんてできない。けど、本当にいいの？」

千咲 「お、面白い、かな」

里見 「ジョジョ面白いよな！」

里見、ぱあっとした笑顔になる。

千咲 M 「新鮮……里見ちゃんが笑顔なんて。わたしも、友達つくるのにこんなじやだめだよね」

千咲 「（恐る恐る）す、好き！」

里見 「そうか！」

千咲 M 「ああよかつた。男ものの趣味言つても大丈夫だ」

千咲 「里見ちゃんとはいお友達になれそう！」

千咲、とびつきりの笑顔を里見に向ける。

里見 「千咲……」

里見、千咲をじっと見つめる。

2人、しばらく笑顔で世間話に花を咲

かせる。

里見「あたし、友達を殺されたのが悔しくて、  
もう二度と大事なもん失わないよう医者  
を目指してんだ」

千咲「え？」

千咲M「なにそれ、わたしなんかよりずつと  
重い過去があつて、わたしなんかと違つて  
がんばつてることじやん。わたしは、  
ちよつとのことでへこたれて。ばかみたい」

千咲、悲しい顔になる。

里見「おい！ あんま悲しい顔すんなよおお  
え」

千咲「あ、大丈夫」

里見「その殺した奴、誰だと思う？」

千咲「さあ、わかんない」

里見「愛梨だよ」

千咲「……は？」

千咲、松葉杖を床に落とす。

里見、松葉杖を拾う。

里見「そろそろ帰ろうぜ」

柏木奈子、2人のもとへ駆け寄つくる。

奈子「千咲ちゃん、お菓子買つてきたわ！  
あなた、お友達ね。いつも仲良くしてくれ  
てありがとう」

奈子、里見にお菓子を渡す。

里見「いえ、こちらこそ」

千咲M「毒舌じやない里見ちゃんだ」

○柏木宅・居間（夜）

千咲、ゲームしている。

千咲M「めちゃくちや気になつたけど、あれ  
は聞ける雰囲気じやないよなあ」

○カフェ

千咲N「そして、1ヶ月後。わたしは無事ケ  
ガが治つた」

カフェの中にたくさんの客がいる。

千咲と彩夏、料理を食べている。

彩夏「デートの誘いに乗つてくれてありがと

うね！」

千咲「あのね！　あの時好きって言ったのは、友達としてだから！　これだけははつきりさせとく！　わたしは友達がほしいの！」

恋人はまだ！」

彩夏「千咲：：」

彩夏と千咲、見つめあう。

彩夏「そつか：：そうよね」

千咲「あ、ごめん」

彩夏「なーんて。そうならそうと言つてよ！」

それなら、千咲を惚れさせるだけだもんね！　まだつてことは、堕とせばいい。千咲を堕とせるのはただ1人、わたしよ！」

彩夏、にやりと笑う。

千咲「わたし女好きじゃないから！　昔彼氏いたから！　ちょっとトラウマなつて女子高来ちやつたけど」

千咲、はつとする。

千咲M「あ、しまつた。また無意識に弱さをさらけ出しちやつた」

彩夏 「そんなの今は関係ないから！」

千咲 「にこつとする。

千咲 「えへへ⋮⋮もうつ」

彩夏 「はい、あーん」

彩夏、スプーンにすくつたパフェを千咲の口に近づける。

千咲、ドキッとする。

千咲、差し出されたスプーンをくわえる。

彩夏 「かわい」

千咲 「もう、あんまからかわいで！」

彩夏 「本気だから」

千咲 「み、みんながいる場所ではわきまえてよね！」

○ 柏木宅・居間

扉が開く。

彩夏と千咲、誰もない部屋に入る。

千咲 M 「まだ奈子おねえさんは帰ってきてない。買い物かな」

彩夏 「ここが千咲が住んでる家かあ」

千咲 M 「友達だから部屋にいれても問題ないよね」

彩夏 「ちーさきつ」

彩夏、千咲に抱きつく。

千咲 「ちよ、彩夏？」

彩夏 「どう？ あつたかいでしょ？ これが人肌よ。千咲、前にいろいろあつて寂しいつて言つてたもんね」

千咲 「そうだけど……ちよつと近すぎだつてば」

千咲の頬が少し赤くなる。

千咲 M 「顔だけは綺麗なんだよなあ。胸揉んできてえっちだけど……こんな迫られたら、みんな嬉しいのかな」

千咲、自分の胸の突起を触る。

彩夏の体がすっと動く。

彩夏 「千咲が好きって想いが、止められないの……」

千咲 「わっ」

彩夏、千咲を押し倒す。

2人の顔が近づく。

千咲「ちよ」

彩夏「いいでしょ？わたし、自分を磨いてきたから綺麗な自信あるのよ」

彩夏、千咲と口づけをする。

千咲「んんっ！んっ！」

千咲と彩夏の舌が濃厚に絡まっていく。

2人の頬が赤く染まる。

千咲M「こんなことしたら友達じゃなくなっちゃうのに、断れない……こ、こんなのが」

2人の口が離れる。唾液が糸を引く。

彩夏、千咲のスカートの中に手を入れる。

千咲「ちよ……」

千咲、M字開脚する。

千咲M「わ、わたしはこんなこと、恋人なん

て望んでないはずなのに、なんで」

彩夏、スカートの中の手を動かす。

千咲「あんっ！」

彩夏 「かわいいよ千咲……」

彩夏、千咲のスカートに顔を入れても  
ぞもぞ動く。

千咲 「脱がせるなっ！ そ、そこっ！ あん  
つ！ ひああああ～ そ、そこだけは舐め  
るなあっ！」

彩夏 「ふう、ふう、ち、千咲の……千咲のが、  
はあ、はあっ」

千咲 「これ以上は、指、舌、感じちやつて、  
我慢、できなからつ……す、ストップ……  
⋮」

彩夏 「かわいい」

千咲 「あんっ！ ああんっ！」

彩夏 「ね、気持ちいい？」

千咲 「いやあっ！ こんなのっ！ ちつ違つ、  
あつ、あつ！ らめええッ！ イク！ イ  
ク！ イッちやう！」

彩夏 「千咲！ 千咲っ！」

千咲 「も……無理！ イクっ！」

千咲、気持ちよさそうにビクビクと何

度も震える。

彩夏 「好き……」

彩夏、千咲を見つめる。

2人、そのままの姿勢で固まる。

扉が開く。

奈子 「千咲、ちやん……？」

奈子、2人を見て呆然とする。

千咲 「あ、奈子おねえさん。これは、違うの」

奈子、扉をそつと閉める。